

「選択の自由」という牢獄

馬に教わるリーダーシップ

第9話 内なる声が導いたモラトリアム

2015年2月3日（火） 小日向 素子



「馬の自然誌」（J.エドワード・チェンバレン著）という本を読んだ。

曰く、

「偉大な調教者は、世話したウマが有名なレースで勝ったから、名高い荒馬を手なずけたから、名を残したというわけではなく、（中略）人と人ではないものとの境を超えたから、偉大になったのだ。わたしたちも日常的にそれをしている。たとえば本を読んで、その架空の世界を生き生きと思い描いたり、あるいは自分を取り巻く世界が変わることを願って祈ったりするときに。」

今いるところから、新たな世界へと、境を超えていく、その手助けをしてくれる「本」や「馬」。でも、馬はただ「超える」という経験をさせてくれるだけではない。

私たち人間の方から、馬によりそい、彼らの言葉を学び、コミュニケーションを

取るということは、

「（ウマの世界の約束事は）わたしたちを変容させてくれる。その言葉を学べば学ぶほど、わたしたちは自分でも気づかぬうちにそれまでとは違った考え方、感じ方をするようになっていく」という。

馬に教わるリーダーシップ、私は、まだまだ入り口に立ったばかりだ。

さて、前回、私自身が全く気づかずにいた私の中のモラトリアム（判断留保）気質を馬に見抜かれたこと、そして、モラトリアムしている理由は、グローバル経済社会の価値観（またはMBA的な思考方法）、から脱却したいと思っているからだ、と書いた。

今回から数回に分けて、馬から離れ、グローバル経済の価値観の問題点とそこからの脱却方法について書きたいと思っている。

というのも、これは「私」だけの問題ではないと思うからだ。

日々の業務に追われるあなた。少し立ち止まり、あなた自身のことを振り返ってみてほしい。

「ぶっちゃけ、実は仕事が全然楽しくない。」

と思っている人はまだ軽症かもしれない。身体からの「感情」という情報を素直に受け取る機能が作動している証拠かもしれない。

あるいは、こんな風に思っていないですか？

「仕事とプライベートはしっかり分けて、プライベートでリフレッシュ！」

それって、人生（自分）を分断してまでもバランスをとらずにはいられないということなのでは？

「自分は自分だし、人と比べられて評価されるのなんていや。」と言いつつ、自分で自分を評価する時には誰か（何か）と比べてみたりしていませんか？

「日々、充実しているし、仕事も好きだけれど、何となく心が埋まらない感じがする。」

正直に言えばそういうところ、ありませんか？

仕事を選ぶための数々の判断基準

私の感覚では、「グローバル経済の価値観」は9割がたの企業人の心の中に刷り込まれているように思う。多くの人はその問題点に気づかずにいて、知らず知らずのうちに真の「私」を見失い、ある意味、真の「私」を殺しながら、頑張ってしまうのではないかと思う。

さらに、質問。

あなたは、仕事を探そうと思った時に、どんな判断基準を持ちましたか？
(一体何を話し出すんだ？と思われるかもしれませんが、しばしお付き合いください。刷り込まれている思考法の問題点の話につながります。)

例えばこんな感じではありませんでしたか？

「東京で暮らすとなると、月にウン十万円ないと暮らせないから、お給料の額がX円以上の仕事」

「家から通える範囲（あるいは、適度な距離のある所）に職場のある仕事」

「人に言ったら、かっこいい！と思われる仕事」

「海外に行ける仕事」

「好きな〇〇と接することができる仕事」

「人と会わない仕事」

あるいは、

「転職しやすい仕事」

「プライベートな時間がたくさんとれる仕事」

「その仕事をする事自体に学びのある仕事」

「従業員数がX人くらいで、自分の裁量が発揮できそうな仕事」

「成長産業なのか成熟産業なのか？」

「どんな職種、業務につけるか？」

「一緒に仕事をする人はどんな人たちか？」

「親や家族が安心する、喜ぶ仕事か？」

「体力的についていけるか？」

「ストックオプションはあるか？」

などなど。

私自身は、自分の成長速度と、周囲の環境変化等をかけ合わせて、条件の組み合わせを変えながら、あれやこれやと延々と考えていた気がする。

いやほんとに。

これまで、いったい私はいくつの条件を思い浮かべつつ仕事の選択をしてきただろう？

ベストの選択をしたのに心が埋まらない

多くの選択肢の中から最善と思えることを選んで、チャレンジして、獲得する。そして、自分が選んだその仕事に対する責任を引き受けるという覚悟もしてきた。結果として「ポジション（立場）」というものが、私の人生に入り込んできて、それには権力や経済力、そして何より社会的信用力＝人から高く評価される感じ、がついてきた。私にとっては、この「社会的信用力」というものが何よりも心地よく感じられた。自分は社会に適応できるんだ！という喜びがあった。

ここまでの話は、多くの読者の方にとって“分かりやすい”のではないだろうか。そして、「それって、普通。何の問題もないよね？」とも思われるのではないだろうか。

でも、理論的に選択したベストな仕事、ベストな私、のはずだけれども、どうも「つくりもの」っぽい。本当の私ではないような感じがしていた。会社のミッションに共感し、従いつつ、利益を最大化する、ということはもちろんやるのだけれど、自分の中で「これをやるぞ！やりたい！」という衝動とつながっていない。「生きる」ことへの欲求とつながっていない、というのが正直なところ。

最初に書いたように「日々、充実しているし、仕事も好きだけれど（私の場合、嫌いじゃない、くらい）、何となく心が埋まらない気がする。」と思っていた。

一方で、今の私はどうだろう。

知識・知性から離れて、論理的に考えず、モラトリアムなまま、判断せず、選択の自由もなく、成り行き任せ。“仕事”なのかなんだかよく分からないまま仕事をする。当然、社会的評価は低い。「信用力？」ないなあ。

つい今朝方のこと。いつのまにか増えた不得意な事務仕事の山に、「事務地獄～！ やだ！ だいたい、これって私が選んだことじゃないよね？ なんか、なし崩し的にそうなっちゃっただけだよな？」などと思う。

この瞬間、昔の私だったら、

「理不尽だ！ 辞めてやる！」

「もっといい条件の仕事を探そう！」

と思ったに違いない。

でも、不思議なことに、今の私には辞める、ということが頭に浮かばない。なぜだろう？

「自由」とは「選択の自由」である

論理とか思考とかを超えて、私の中の内なる衝動に従っているのだから、何があるろうと「仕方がない」という感覚はある。それに、言葉ではうまく説明できないのだけれど、日々成長している感じがあって、「生きている」実感がある。そういう感覚は、いくら「人から高く評価されている感じ」があっても、会社員時代は持つことができなかった感覚だ。

昔の私はやっぱり何かがおかしい。社会的信用力があって嬉しいけれど、自分らしくない気がする。モラトリアムで、社会的信用力はゼロだけれど、生きている感じがする今の私のほうが、生きる力、というか、少なくとも生きようとする力があると思う。

このギャップはなぜ生じるのか？ 明快な論理的解説をしている本に、2012年に出会っていたことに最近気がついた。

「生きるための経済学〈選択の自由からの脱却〉」（安富歩著）という本だ。

いったん、思考をやめたこと。

選択をしていないこと。

モラトリアムでいる今。

それなのに、かすかに、生きる力が湧いてきているように思うこと。

この本にそのプロセスの意味が描かれている。そして、モラトリアムからの脱出方法についてもふれられている。

安富教授によれば、市場経済学（私の言葉では、グローバル経済社会の価値観）でいう自由は、実は「選択の自由」であるという。この「選択の自由」は、経済理論だけでなく、西欧社会ではあらゆる場面に通底する考え方だ。

人間は、人生の様々な岐路で選択する能力が与えられていて、それが他の動物とは異なるところであり、この選択肢が十分に与えられた状態が「自由」である。そして、自分で選んだためにもたらされた結果については、自分が責任を引き受けなければならないという。

分かる！

たくさんの可能性の中から転職先の会社を“選び”、その結果に責任を持つ、という思考で私も生きてきた。ひとつの会社（仕事）に縛られず、自由に生きているように思っていた。

でも、ポイントはここからだ。

自由の牢獄からいかに脱出する？

実際には、選択の自由は嘘である、というのだ。もちろん選択肢は常に無数にあるけれど、選択したとしても、もたらされる結果は予測できない。そういう世界の中で「選択する」という判断を常に迫られて生きることが、本当に「自由」だろうか？

ミヒャエル・エンデの「自由の牢獄」という短編がある。無数の選択の扉に囲まれた男が、選択の結果を恐れて、どの選択もできない、という牢獄に閉じ込められる。最終的には神の判断に任せるという境地に達することで牢獄から逃れる、というものだ（安富教授は、牢獄から逃れるために神に委ねるという方法をよしとせず、他の方法を提示している）。

私は、まさに選択の自由の牢獄にいた。

今の私は、エンデのこの物語の中の、クライマックス一歩手前。選択の扉が消えたところ、だと思う。

選択し続けるだけの苦勞からは解放されたけれど、まだ、扉のなくなった部屋の中にいる。

まさに、ゴールがない、状態。

選択留保＝モラトリアムの状態。

うーん、やっぱり、馬がこの深層心理を読んだのだと思う。

「生きるための経済学＜選択の自由からの脱却＞」では、選択の自由のことをさらに深めて、グローバル経済社会の価値観をモデル化して提示している。ネクロフィリア・エコノミクス（死に魅入られた経済学）という。次回、ネクロフィリア・エコノミクスを紹介することで、グローバル経済社会の価値観の「問題点」をさらに明確にしていきたい。その後、そこからの「脱出方法」について提示したいと考えている。

｜ このコラムについて

馬に教わるリーダーシップ

外資系IT企業日本支社の部長としてマネジメントに奔走していた「私」は、リーマンショックに伴う業績悪化から突然解雇される。新規ビジネスの立ち上げを模索する中、以前から疑問を抱いていた自分自身の統率力やコミュニケーション能力に向き合うきっかけがやってくる。それは偶然からの「馬」との出会いだった。

群れで生きる馬は、そのときどきの生存環境に最もふさわしい資質を持つリーダーに一期一会で従うという。言葉を理解しない馬と意思を疎通するうちに「私」は自分なりのリーダーシップ、そしてコミュニケーションの本質について学んでいく。

人間の振る舞いを鏡のように映し出す馬を通して、卓越したリーダーシップ、優れたチームワークとは何かを探し求めていくオン・ザ・ウェイの物語。